様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２３４６

研究課題名（和文）アジアのシェイクスピア上演と伝統芸能－琉球歌劇と新作能を中心に－

研究課題名（英文）Asian Traditional Theatre and Shakespeare : with special focus on Ryukuan Opera and Newly Created Noh-

研究代表者
鈴木　雅恵（SUZUKI, Masae）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：７０２６８２９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：アジアの伝統演劇へのシェイクスピア劇の融合を模索する研究の一環である本研究では、特に『オセロ』と『夏の夜の夢』を中心に、新作能や沖縄芝居、琉球歌劇、新作組踊におけるシェイクスピア受容に焦点を当てた。『オセロ』の方は、日本と沖縄における『オセロ』の受容史を日本語論文にまとめた上で、泉紀子氏≪新作能オセロ≫の詞章を英訳した上で、上田邦義氏、関根勝氏、下館和氏等による翻案および、大城立裕氏の『新作組踊・今帰仁落城』と比較した英語発表をおこなった。『夏の夜の夢』の方は、沖縄における受容史を中心に英語論文をまとめ、また、乙姫劇団の「時代歌劇・真夏の夜の夢」の上演台本を英訳して、韓国や中国の例と比較した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
この研究は、「日本」のシェイクスピア上演研究を、大和経由で西洋化した沖縄でのシェイクスピア受容の観点から見直し、また、明治維新以来、古典上演を中心に継承されてきた能楽の、新作能としてのシェイクスピア受容の例と比較することにより、ここ２０年ほどの間に西欧理論中心におこなわれてきた「アジア」のシェイクスピア上演の研究をアジアの伝統演劇の観点から見直すことを目的としている。沖縄の歴史に焦点を当てた上で、新作能や琉球歌劇の翻訳を通じて、中国圏や韓国の研究者や実演家との交流をも深めて相互の歴史や文化を見直し、国際社会に対して、アジア圏の理論を構築して発信していくことがこの研究の社会的意義であると考える。

研究成果の概要（英文）：The final aim of my research is to analyze how Shakespeare plays, as representative of western theatre can be used to vitalize the indigenous Asian theatre. The focus on this project was on the examples of "Othello" and " A Midsummer Night's Dream" in mainland Japan and Okinawa. In addition to the thesis on the reception of those plays, a full English translation of Izumi Noriko's script on ≪Shinsaku-Noh Othello≫ was made as an attempt to introduce the new Noh to those who are not familiar with classical Japanese as well as to enhance the collaboration with international scholars. The full English translation of the Ryukyuan Opera version of A Midsummer Night's Dream, originally created by the all-female troupe Otohime Gekidan was also completed, in order to examine the style it can be re-produced by the present Okinawan troupe, Unai. All the research will be used as the basis to collaborate with other Asian researchers and practitioners on international platforms.

研究分野：比較演劇

キーワード：シェイクスピア上演　新作能　沖縄芝居　琉球歌劇　アジアの伝統演劇　乙姫劇団　劇団「うない」　東西演劇交流

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1990 年代以後、「アジア」のシェイクスピア上演が学術的なテーマとして認められはじめ、私自身、国際シェイクスピア学会、国際演劇学会、国際比較文学会等で、研究発表を続けてきた。しかし、英語による発信を中心とする「国際的な」研究発表と、日本語、うちなー口、中国語をはじめとする、地域語による、各国での研究成果発表との間にはギャップが見られ、特に、伝統演劇へのシェイクスピア受容を扱う場合、それが顕著であった。

この研究プロジェクトの開始年の２０１６年は、シェイクスピア没後４００年にあたり、彼の生まれ故郷であるストラットフォード・アポン・エイボンにて国際シェイクスピア学会が開かれたほか、様々な国際的なイベントや共同研究がおこなわれ、地域差を超えた共同プロジェクトが模索された時期でもあった。
そうした背景を踏まえ、本務校である京都産業大学と日本演劇学会との共催で、「シェイクスピア・ローカル・グローカル」というテーマで演劇集会を主催する用意ができ、京都の大江能楽堂で<新作能オセロ>の上演をプレ・トーク付きで企画されるなど、プロジェクトを進める環境が整いつつあった。

２．研究の目的

シェイクスピア劇がいかに「アジア」の伝統演劇を活性化できるか、ということを探り、かつ、西欧理論に拮抗するアジア側の上演理論を構築することが最終目標であるが、本プロジェクトは、関西発祥の伝統芸能である能と、日本とほかのアジア圏との中継地点でもある沖縄の伝統芸能、という領域へのシェイクスピア劇の受容と上演を研究対象の二本柱として英語と日本語の論文をまとめ、詞章の英訳を完成させて、他国での上演や、国際的な共同研究を可能とする基盤を作ることを今回の研究目的とした。また、新作能と同等に沖縄芝居へのシェイクスピア受容を論じることにより、「日本のシェイクスピア」を論じる時に見落とされがちだった、沖縄の例を、シェイクスピア上演史の中に正しく位置付けることも、目的の一つである。

３．研究の方法

（１）シェイクスピア、能楽、沖縄演劇、中国演劇、古代信仰研究等を含む、異なる専門分野の研究者や実演家を研究協力者に研究会や情報交換
（２）シェイクスピア、能、沖縄芝居のテキスト研究に加えて、能楽、沖縄芝居の稽古への参加・見学、地域公演への同行観察等を含む、上演研究
（３）上演台本の分析をおこなった上での、シェイクスピアを本説とする新作能及び沖縄芝居・琉球歌劇の英訳及び注釈の作成
（４）論文の作成

４．研究成果

新作能と、沖縄演劇の中のシェイクスピア受容の研究を二本柱としてきたが、この二つについて、まず、2016 年 8 月にストラット・フォード・アポン・エイボンで行われた国際シェイクスピア学会で紹介し、欧米の研究者のみならず、中国、韓国、インドなど、ほかのアジア圏のシェイクスピア研究者からも今後の共同研究を持ちかけられ、次のプロジェクトに入る準備も整った。

研究協力者の泉紀子氏が詞章を書いている新作能シェイクスピア・シリーズについては、論文作成の他、<新作能マクベス>の英訳に続いて<新作能オセロ>の英訳も完成し、大江能楽堂での上演記録 DVD に英語及び中国語の字幕を付けることによって、海外の研究者に発信しやすくなった。2016 年 12 月に京都産業大学でおこなった演劇集会には、武漢大学外語学院シェイクスピア戯劇工作室主任の熊傑平氏を招聘し、漢劇(湖北省の地方劇)版『じゃじゃ馬馴らし』について講演をしてもらったが、2018 年には、彼の紹介で、武漢美成劇院に赴き、能や日本のシェイクスピア受容について紹介した上で、楚劇の関係者と研究発表会と交流会を持ち、地域に根づいた中国と日本の伝統演劇の稽古方法について意見を交わすことができた。

沖縄演劇については、与那覇晶子氏、大嶺佳代氏、劇団「うない」の中曽根律子団長等の協力を得て、２０年間再演されていない「時代歌劇・真夏の夜の夢」の京都公演の可能性について検討した。諸事情から、プロジェクト期間内での再演は実現できなかったが、台本の英訳を見直す機会にはなった。また。2019 年にケンブリッジ出版から出された *A HISTORY OF JAPANESE THEATRE*（Jonah Salz 編）に“Okinawan Theatre: Boundary of Okinawan Theatre”という拙論を英文で寄稿したことにより、本研究の目的の一つである、「日本のシェイクスピア」を論じる時に見落とされがちだった、沖縄の例を、上演史の中に正しく位置付ける、という試みはある程度実現に近づいたのではないかと考える。

本プロジェクトはこれで終わりであるが、「シェイクスピア・ローカル・グローカル」という枠組みの中、今後も、新作能の研究を深めるとともに、沖縄・韓国・中国・フィリピンなどの伝統演劇への考察をおこない、「アジアのシェイクスピア受容」という、より大きなテーマの研究を今後も続けるつもりである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 Masae Suzuki	４．巻 53
２．論文標題 “Shinsaku-Noh Othello”	５．発行年 2016年
３．雑誌名 Shakespeare Studies Volume 53, The Shakespeare Society of Japan	６．最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 鈴木雅恵（Masae Suzuki）
２．発表標題 The Reception of Shakespeare in Japan
３．学会等名 日本新作能《麦克白》放映会　（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木雅恵
２．発表標題 「日本」の『オセロ』の受容と上演」
３．学会等名 新作能研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木雅恵
２．発表標題 Talks with Matsuoka： シェイクスピアの戯曲の翻訳に関わって
３．学会等名 新作能研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木雅恵
２．発表標題 『新作能マクベス』への道
３．学会等名 日本比較文学会関西支部研究例会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Masae Suzuki
２．発表標題 “Shakespeare, Noh, Kumiodori and Ryukyu Opera: Recreating Shakespeare in classical Japanese and Okinawan theatre”
３．学会等名 World Shakespeare Congress（国際シェイクスピア学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Masae Suzuki
２．発表標題 Is all the World Still a Stage? Shakespeare and Higher Education in Japan
３．学会等名 日本演劇学会秋の研究集会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 泉紀子編、辰巳満次郎、瀬戸宏、鈴木雅恵他８名著	４．発行年 2019年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 199
３．書名 新作能オセロ	

１．著者名	４．発行年
Jonah Salz編、Monica Bethe, Cody Poulton, Lawrence Kominz, Thomas Rimer, Samuel Leiter, Paul Griffith, Willam Lee, Barbara Thornbury, Daniel Gallimore, Masae Suzuki and 47 others	2016年
２．出版社 Cambridge University Press	５．総ページ数 550
３．書名 A History of Japanese Theatre	

〔産業財産権〕

〔その他〕

２０１６年１２月３日には、日本演劇学会秋の演劇集会Shakespeare Local Globalの前夜祭という位置づけで、京都・大江能楽堂にて、≪新作能・オセロ≫の上演を主催し、また、上演前に詞章の作者の泉紀子氏と、シテ方として主演し、節付けも担当した辰巳満次郎氏とのプレトークを企画し、司会・進行をおこなった。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考